

# 小学校教育に見る音読及び話し方の指導法について —小学校教科書より—

高木香与呼

## 1. はじめに

近年、国語教育において、従来の「読む・書く」に加え、「話す・聞く」にも重点を置くという変更があった。本校の「日本語表現法」もしかしだが、各大学では、同様の日本語力を上げる授業が多くみられる。このような若者の言葉の表現能力が低いことを受けてのものだと推測される。本稿では、小学校の教科書と指導書から、言葉のバーバル表現においてどのような指導が加わったのか見ることにした。声の強弱や高さ、読む速さ、間の取り方の表現に欠かせない要素が初めて出てくる、小学校国語教科書三年上の音声表現における指導について調べ、方法を考えたい。

## 2. 各学年「話す」の「たいせつ」の内容

まず小学校各学年の教科書から「話す」「読む」項目の重要要素である「たいせつ」の中から音声表現についての項目を以下に学年ごとに抜粋する。

### ・一年

特になし

### ・二年

みんなに聞こえる声で話す。

(音読部分)

人物のしたことや様子を考えながら音読する

人物の言ったことやしたことを確かめ、声の出し方などをくふうする。

### ・三年

声の強弱や高さ、読む速さ、間の取り方などに気をつけて読む

### ・四年

声の大きさや速さ、強弱、間の取り方に気をつけて、大事なことが伝わるように話す。

(物語読書の読む項目の中の音読部分)

場面の様子を聞き手に伝えるためには、どの言葉や文を強調して読めばいいか

登場人物の様子を表すためには、どの言葉をどんな調子で読むのがいいか

場面の位置づけがよくわかるようにするためには、どう変化をつけて読めばいいか。

・五年

特になし

・六年

発表やスピーチをするときには、その場に応じた話し方をすることが大切である。

聞き手に応じて、声の大きさや速さ、表情、身振りなど、話し方を工夫する。

最初に音声表現の要素である「声の強弱や高さ、読む速さ、間の取り方などに気をつけて読む」の記述の出てくるのは、小三であるため、その小三上の教科書および指導書・指導書別冊（以下「別冊」とする）をとりあげることにする。

### 3. 「たいせつ」に対応する指導書の内容

まず、教科書にはポイントとして「・強く読むところや、弱く読むところを考える。・読むはやさや、声の高さをかえる。・とくに聞いてほしい言葉の前や後で、少し間を取る<sup>1)</sup>。」(P22)とある。

別冊の朱書きは、この説明に「○今後の音読にもつながるポイント<sup>2)</sup>」とあるが、どこをどの程度の強さ、スピード、間の時間などについての記述は一切ない。同じく、たいせつのまとめとして、P24にも同じ説明があるが、同様に朱書きには詳細な工夫の内容の説明はない。

同じ箇所の指導書を見てみる。教師の教える指針として、「教師の手立て・対応」という項目があるが、声の強弱や高さ、読む速さ、間の取り方についての対応は「場面を想像させる」「声にちょうしをつけたり、様子を表して読んだりする工夫にはどんなものがあるか問い、できたものを板書に整理する。それぞれに音読記号を決めるのもよい<sup>3)</sup>」とあり、やはり具体的な手立てはないように感じる。また、間に関しても「工夫を認めながら、語句のまとまりを意識して間をとること」としか書かれていない。

音の見える化の工夫としては、音読がんばりカードが挙げられている。音読がんばりカードの項目には、音読で気をつけることの項目に、・しせい・声の大きさ・読むはやさ・口の形・話のはじめをはっきり・声にちょうしをつける・ようすを思いうかべる、がある。それぞれに、今の自分と今日の学習の二項目をチェックできるようになっている。この項目はとても役に立つ項目であるが、それぞれ、どの程度までが許容範囲かなどは教師の感じ方にゆだねられているようで、基準は書いていない。

また、指導書には音読CDが付属されており、教師が自ら示さなくとも読む見本を示すことができるようになっている。これが付属されているのであれば、CDの音読のポイントを指導書や別冊に書き添えてもいいのではと感じたが、指導書の中にはそういう記述は見つけれなかった。あくまで「工夫する」や「変化をつける」「間をとる」などの記述にとどまっている。

#### 4. 音声の抑揚と強弱を表現するということ

1983年発行の「言葉と音声」の学校教育における音声指導には（三）で音量や速度に関して三・四学年に位置づけられると書いてあるのに続き、音声の表現方法について、「音声の抑揚はアクセントとイントネーションによって発話し表現される。（中略）イントネーションは、語の卓立強調のプロミネンスとともに、発話による心の情感を表現する機能を果たしている。いずれも抑揚・強弱は高度な話し方の技術である。アクセントは語音とともに音の高低によって客観的意義を表し、イントネーションとプロミネンスは、主観的な意義を表す。イントネーションが文脈の切れ目や文末に表現されるのに対して、プロミネンスは、語の卓立強調であるから、意図的に文中の後に表現される。いずれも伝達内容を一層理解させるうえで、欠かせない話し方の技術である<sup>4)</sup>。」P91（四）音声の抑揚・強弱に関してこう書いてある。

ここに書いてあるように、抑揚であるアクセントとイントネーション。そして卓立目的のプロミネンス（強弱）は高度な話し方の技術なのである。そしてそれらの技術は伝達内容を理解させるために必要不可欠な技術なのだ。

高度で不可欠な技術であるにもかかわらず、教える側の教師に与えられている指導書及び指導書別冊には、詳細な指示は見つけられなかった。

また、1980年代に発行されたこの「ことば」シリーズ18以降、音声表現をとりあげたものは、このシリーズはじめ文化庁からは出ていない。ここでは取り上げていないが、この本に出てくる言葉や表現、いつ何を教えるかについても、現在の指導書とほぼ同じであることも興味深い。音声表現の教育における重要性が軽視されてきたのではないかとも思える要因の一つだ。

#### 5. 音声表現の方法の考察

教科書や別冊、指導書からは「調子をくふうする」の内容は、「強弱を考える」「間を取る」「高低を変える」「はやさを変える」との記述のみでそれ以上の記述を見つけないことができなかった。

もちろん、強弱・高低・スピード・間を記述で表現することは頗る難しい。また、人によっても感性の違いがあることから、良い読み方というのは一つではなく、幾通りも考えられる。だからこそ難しく、どこをどのように記述できないのだと想像できる。しかし、読解力があっても音声でどう表現するかは、全く別の技術が必要になる。そういった教育を一度も受けていないのであればなおさらであろう。音読表現の技術教育を受けたことがない教師に任せてしまうというのは荷が重いように思われる。音感や感性が優れており、聞いたものをすぐに再現できる能力を持っている人もいることはいるが、全員が持っているとは考えにくい。この解決には、より詳細な指導内容を書き入れるか、セミナーなどで音声表現技術を習得することが必要だといえる。

音の違いを言葉で表現するのは大変困難である。音楽の素晴らしさを、聞いたことのない人に言葉で説明するようなものだ。曲をそのまま聞かせるのが一番である。単純だが、言葉で表現す

るより多くのことを伝えることができるとともに、違いも分かりやすい。そのための音読CDだろう。

また、それを聞かせるのであれば、最初に自分の音読を録音し、そのあとCDを聞くという方法もある。あらかじめ決めておいた「強弱」「高低」「スピード」「間」の音声記号を両方の録音について書きとめ、「強弱」「高低」「スピード」「間」それぞれの、どこがどのように違うかチェックする。そうすれば、自分とCDの違いがなんであるのかがもっと詳細に、しかも明白にわかるだろう。ただしこの方法に時間をかけられるかどうか不明である。

音を書き記す手立ても考えてみた。小三上の「声の強弱や高さ、読む速さ、間の取り方などに気をつけて読む」の文章を例に表記法を試みてみると、

### きつつきの商売⑤

きつつきが②お店を開きました。③

それはもう、①きつつきにぴったりのお店です。④

#### 記号の意味

下線部 = スピードをゆっくりにする

太文字 = 前後より高くする

囲み文字 = 前後より声を大きく（強く）する

網掛け = 前後より声を弱める

○囲み数字 = 間をとる場所。中の数字は長さ

このような形が考えられる。CDを聞きながらこれを書き込むのもよいし、あらかじめ教科書や別冊に書き示しておく。ベースとなる読み方を身につけられるだろう。

これを見ながら読んだ後、自分が違和感を覚える部分があれば変えてみるという方法をとることもできる。また、この通り読むよりよりいい表現があると感じたら、変更して自分の読みを確立していくのもいいだろう。バリエーションが広がる。

記号についても、これでは足りない部分があるかもしれない。例えば強弱やスピード、高低は前後との差でしか書いていないことだ。これも、間のように数字で段階をつけたりすると、なおよいだろう。

また、イントネーションの高低差でよく使われる、

きつつきが

お店を

開きました。

のように、段差で高さの違いがわかるようにするのもいいだろう。

自由に読み、お互いのものを批評しあい、いいものはどれかを探すことも大切ではあるが、最低限の方程式のような基礎を入れておいて、そこからもっと「工夫する」「調子を変える」を積み上げるほうが、結果的には音読教育の授業時間の短縮につながると思えてならない。

## 6. 今後の課題

本稿では、小三上の教科書の指導書をもとに考察したが、小四のたいせつにも「強弱や高さ、読む速さ、間の取り方などに気をつけて読む」とある。次回はその指導書別冊および指導書の内容についても調べたい。

## 参 考 資 料

小学校国語学習指導書 3年音声 CD 朗読／話すこと・聞くこと 光村図書出版

## 参 考 文 献

- 1) こくご 三上わかば, 光村図書出版, 2015
  - 2) 学習指導書別冊 国語三上わかば, 光村図書出版, 2015
  - 3) 小学校国語 学習指導書 三上わかば, 光村図書出版, 2015
  - 4) 文化庁, 「ことば」シリーズ18 言葉と音声, 大蔵省印刷局, 1983
- こくご 一上かざぐるま, 光村図書出版, 2015  
こくご 一下ともだち, 光村図書出版, 2015  
こくご 二上たんぼぼ, 光村図書出版, 2015  
こくご 二下赤とんぼ, 光村図書出版, 2015  
こくご 三下あおぞら, 光村図書出版, 2015  
国語 四上かがやき, 光村図書出版, 2015  
国語 四下はばたき, 光村図書出版, 2015  
国語 五銀河, 光村図書出版, 2015  
国語 六創造, 光村図書出版, 2015  
NHK アナウンスセミナー, 日本放送出版協会, 1987